

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

新宅よしみつ

プロフィール

1950年広島県呉市倉橋島にて生まれる。高校を中退して上京。漫画家のアシスタントになる。1972年「少年マガジン」増刊号『闇に光る眼』でデビュー。『トリプルファイター』『流星人間ゾーン』『鋼鉄ジーク』等コミカライズ作品多数。

漫画家になりたくてなりたくて……
高校を中退していきなり上京した日

「つれづれ草」に参加したのは、17歳のときです。私が上京してから1年ぐらい経ったときでしょうか。創刊メンバーの北沢三喜男さんとは、漫画雑誌の投稿仲間だったので文通していたんです。その縁で他のメンバーである藤沢武夫さんや山下幸雄さんとも知り合いました。当時、大泉学園のアパートに住んでいたんですが、そこでみんな集まって「つれづれ草」を編集していた覚えがありますよ。そのうちに、広島にいたときの投稿仲間だったおだ辰夫君や福田達雄君、それから岩崎健二君、恵谷章君、あと愛媛にいた高岡凡太郎君も「つれづれ草」に参加するようになりました。



私は創刊メンバーでもなんでもないので、なぜか「ボス」と言われていました。自分で考えても、メンバーを引っ張るほどの力は全然なかったんですけどね。漫画家になろうとして、いきなり高校を中退して上京したことが、みんなを刺激したのかもしれないですね。今思うと、よくあんな無茶苦茶なことができたと思いますよ。当時

は漫画家のアシスタントになるだけでも大変でしたし、そもそも漫画家になる方法なんて、誰も教えてくれなかったわけで。私がたまたま仲間の中でいちばん先にやったというところで、みんなの励みになったのかな。

そもそも漫画家になりたいと思ったのは、小

学校の高学年から中学にかけてでした。当時、似顔絵を「少年画報」とか「冒険王」に描いて投稿して、百回ぐらい載りました。だんだん似顔絵だけでは飽き足らなくなってきた、自分でストーリーものを描いてみたいと思つて、自分でコマ割りをし始めたのは中学3年のとき。手塚治虫さんや横山光輝さんの漫画で育つたようなものでしたから、SFっぽいものを描き始めたんです。当時、貝塚ひろしさんが主宰していた「まんがマニア」という会員向けの雑誌があつて、そこで掲載されたりして調子に乗つたというか（笑）。これなら東京に出て勉強すれば漫画家になれると。

それで行つたんですよ、東京。高校1年のときに一人でね。いろんな漫画家さんのところを訪ねてサインもらつたりして。それで井上智さんのと

ころに行つたときに、将来漫画家になりたいんだつたら、うちに来なさいと言つてもらつて。もういてもたつてもいられなくてね。高校を辞めて東京に行こうと。

当然、親には怒られましたよ。高校ぐらいちゃんと出ろと言われてね。特に親父は大反対でした。うちは旧家で、しかも私は本家の長男でしたから、もうすごかったですよ。お袋も親父に習えという感じでした。勘当寸前のところまでいきました。でも絵を描きたい、漫画家になりたい、という一心で、ほかのことはもう眼中になかった。勉強はそんなにひどい成績じゃなかったんです。だから高校の担任の先生にも反対されて。でもそのとき、美術の先生だけが味方してくれたんです。その先生に自分の描いた漫画を見せたら、悔いのないように思い切りやつてみるといいと。

それで踏ん切りがついて。

たった一人で家を飛び出しましたが、不思議と心細いとか不安だという気持ちはなかったですね。当時の漫画雑誌って週刊誌では「少年マガジン」と「少年サンデー」「少年キング」の3誌だけで、あと月刊誌で「少年ブック」や「冒険王」「まんが王」「少年画報」があつたぐらいじゃないですか。青年誌もなかったから、本当に一流の漫画家しか執筆できない時代でした。そうした漫画家のアシスタントになれるというだけで嬉しかったです。

偉大な先生から盗んだテクニクの数々 少しほろ苦い思い出のデビュー作

上京して住んだのは、井上智プロダクションのある富士見台のアパート。井上さんは手塚治

虫さんのお弟子さんで、当時手塚さんのカラー原稿を一手に引き受けていたんです。『鉄腕アトム』や『マグマ大使』といった作品のカラーのほとんどは井上さんが塗ったといつても過言ではないですね。とにかく色づかいがすごく上手かったです。

私自身、智プロでは大した仕事はしてません。消しゴムかけとかベタ塗り程度。当時言われたのは「こちらから一切教えることはしない。自分で見て盗め」と。職人の世界というか、まあそんなものかと思っていました。私は色を塗るのが好きだったので、井上さんがカラーページを塗っているところをじーつと見ていましたね（笑）。井上さんって、常に3本ぐらい筆を持ちながら塗るんです。そのうちの1本は口にくわえてね。そこで盗んだのは、筆でどうやって色を重ねるか。

ぼかしの仕方はどうすればいいのか。あるいはもつと具体的に「鉄」の色を出すには、どの色とどの色を混ぜたらできるのか、といったことを勉強しました。

智プロにいたのは1年ぐらいかな。そのあと久松文雄さんのアシスタントになりました。実は広島にいた頃、久松さんの『スーパージェッター』に惚れ込んでいたんです。それでずっと文通をしていたんですが、あるとき久松さんのところに遊びに行つたとき、アシスタントに来てくれないかと言われたので、井上さんに相談したんです。もしたらこころよく送り出してくれました。好きな人のところでやるのが一番だよと。なんだか申しわけなかったですけどね。

それで久松さんがいる大泉学園の古いアパー

トに引越しました。久松さんは週刊誌の連載をやっていたので、徹夜続きで休みはあまりなかったかな。でも若いからなんとかなっていた（笑）。久松さんのところでは斜線の引き方や背景の描き方を覚えました。久松さんはフリーの線を描くのがすごく上手だったんですよ。特に楕円を描くのが得意でね。私はそれを覚えたくて、もう時間があつたらひたすら練習していました。

デビューしたのは、久松さんのところを辞めたあとです。実はそのあと、久松さんの連載がだんだん終わってしまい、このあたりが潮時かなという感じになりました。辞めてから自分で作品を描いてあちこち持ち込んでいたんですが、あまり芳しくなかつたんです。なので、「少年ジャンプ」で『くじら大悟』を連載していた梅本さちおさんのアシスタントになりました。割と長くやり

ましたね。5年ぐらいかな。合間に自分で漫画を描いて投稿していたら、講談社で佳作に入って、「少年マガジン」の増刊号で1本オリジナルを描かせてもらいました。『闇に光る眼』という海洋冒険ものです。わくわくするようなものを描きたいと思っていたので、アクアリングを使って海の底を探検するような漫画にしました。ただ、あまり人気投票で上位に行けなくてね。それ以上、描かせてもらえなくなりました。時代に合わなかったというか、読者は冒険ものに興味が湧かなかつたんでしょう。

そのあと、同じ講談社の「テレビマガジン」で『トリプルファイター』や『流星人間ゾーン』のコミカライズを描かせてもらいました。あと桃園書房で子供むけの釣り雑誌に『俺はチャレンジャー』という漫画を描きました。少年が主人公

で、毎回釣る魚が違って。仕掛けとか魚が生息する地域の説明が入ったりする漫画でした。10回ぐらい続いたと思いますが、結構楽しい仕事でしたね。もともと海の生まれですし、小さい頃は元の小さな船でよく釣りをしましたから。そのときは、梅本さんのところを辞めて、本屋でバイトしながら描いていました。20代後半の頃です。

ダイナミックプロで怒濤の漫画生活と オリジナルの漫画への思い

30歳になった頃、知り合いの漫画家さんの紹介で、永井豪さんのダイナミックプロに行くことになりました。私はおもに背景をやることになりました。永井さんはもともと背景があまり得意ではない、というかあまり描いたことがない人だったんです。頭の中にイメージはあるだけ

ど、それを具体的な背景にして描くことができなかつた。だから下書きを見ても、「お城」と書いてあるだけだったりしてね（笑）。それを私たちスタッフが考えながらデッサンして下絵を描いて永井さんに見せる。OKをもらったらペン入れにはいりました。もし見せないでペン入れしてしまったとしても、それが永井さんのイメージに合つてなかつたら、即、やり直しでした。

永井さんは、自分の作品についてはものすごく厳しい人でしたけど、先生、という感じではなかつたですね。とても優しい性格の方でしたし、みんなを引きつけるものを持つていたんでしよう。優秀なスタッフをたくさん抱えて作品を量産できたのは、永井さんの人柄によるところが大きいかつたんじゃないかな。

週刊誌の連載が

2本ぐらいあると、5〜6人で1本を2日で終わらせないといけなかつた。徹夜明けでやることが多くて、終わったらみんな飲み会をやつてましたね。



『トリプルファイター』講談社「テレビマガジン」掲載



『俺はチャレンジャー』桃園書房「少年つりマガジン」掲載

明け方にみんなで近くのコンビニに買い出しに
言つて、いちばん下っ端の男の子にアダルトビデ
オを借りに行かせてみんなで酒飲みながら見る
んです。そんなの見たら、眠れなくなっちゃうん
ですけど（笑）。まあでもそのあと寝て、昼の2
時か3時に起きるんです。それで喫茶店に行つて
ちよつとのんびりしてから、夕方からまた仕事と
いうサイクル。なんだか今から考えても、無茶苦
茶だったなと（笑）。

自分でオリジナルの漫画を描こうという気持
ちは絶えずありました。でも言い訳じゃないんで
すけど、ダイナミックプロの仕事から帰つてきて
からなかなか描こうという気にはなれないんで
すよ。オリジナルを描こうと思うと、また次の仕
事が入ったりして。だから短期間でできるイラス
トの仕事を受けるようになってきました。ある意

味、そういう風に流れていったという感じでしょ
うか。私と同じような状況の人もいたと思いま
す。それでもオリジナルを描いて持ち込みをして
いた人は偉大ですけどね。

**思い切つて帰郷を決心した頃――
いつかお年寄りの世界を漫画にしてみたい**

ダイナミックプロに行く前は、いろいろオリジ
ナルを持ち込んでいたんですが、自分の描きたい
ものと、編集者が求めているものがちよつと合わ
ないことが多かったですね。私はストーリーに比
重を置いた漫画を描きたかったんですが、どう
もそのあたりがうまく噛み合わなかった。もつと
キャラクターに魅力がないといけなかったのだと
思います。それは今振り返るとわかることで、
当時はよくわかっていなかったようです。ストー
リーが面白ければそれでいいと思ひ込んでいまし

たから。それで正直、何を描いたらいいのかわからなくなりました。そうやって模索しているうちに目の前の仕事に追われていきました。あと、生活にもね。

結婚は遅かったです。実は妻の親が結婚を認めてくれなかつたので、同棲していたんです。妻も編集関係の仕事をしていたので、漫画の仕上げを手伝ってくれたりしました。2年ぐらい一緒に住んでいたら、ようやく向こうの親もあきらめてくれたみたいで（笑）、広島の実家で式を挙げることができました。永井さんも駆けつけてくれましたよ。嬉しかったです。

地元に戻ったのは、89年（平成元年）です。実は家は本家でしたから、いつかは帰らないといけないと思っていました。親父が亡くなり、お袋が

一人になったのがいい機会だったんでしよう。また、地元の広島にテレビゲームを作っている会社があつて、そこで絵を描く人を探しているということで、紹介を受けたこともあり、思い切つて帰る決心をしました。ちょうど下の娘が生まれた頃だったかな。

テレビゲームの仕事は10年ぐらいやりました。ゲームも最初はずいぶん儲かつたみたいですけど、だんだん厳しくなつてね。ついにゲーム業界から撤退することになり、私は同じ会社の系列にある介護施設に異動になりました。今は生活相談員の仕事をしています。

今も絵を描くことはあるんですけど、漫画となるとなかなか時間が取れなくてね。家の周り畑と海ですから、天気の良い日はまず描く気にな

りません（笑）。じゃあ釣りに行こうかという話になっちゃう。あるいは畑仕事しようかなとか、草刈りしなきゃとか。とにかく田舎は誘惑が多いです（笑）。

今、月に一回、民間のデザイナービスにボランテニアで絵を教えにいつているんですよ。今回はクレヨンで描こうかとか、切り絵にしようかとか、毎回結構頭を悩ませるんです。みなさん結構楽しみにしてくれているようで、そうなるとなかなか手を抜けない（笑）。もう3年になるかな。お年寄りの世界も深いですよ。いつか介護を題材にした漫画を描いてみようという気はあるんだけど。お年寄りの生活を面白おかしくね。まあ気長に待っていてください。

●インタビューを終えて

「つれづれ草」メンバーの中でも誰よりも先に漫画家の道に突き進んだ新宅さん。その猪突猛進な漫画家人生は、多くの人に大きな影響を与えたようです。本当にいろんなことがあったんだな、と驚いたり感激したり、さらには少ししみみりしたりと。漫画を通して人生というものを教わった気がします。ぜひ、再び漫画を描いていただきたいと願うのは私だけではないはずです。

文／中島泰司

2009年10月4日

呉・倉橋島の自宅書齋にて

